

高校	受験番号	
年 組 番	氏名	

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てもいいません。

2022 年度

最終 共通テスト本番レベル模試

国 語 (200 点 80 分)

I 注 意 事 項

- 1 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 受験番号欄

受験番号(数字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

② 氏名欄、学年欄、受験校舎欄

氏名・フリガナ・学年及び受験校舎名(会場名)を記入しなさい。

- 2 この問題冊子は、51 ページあります。問題は4問あり、第1問～第2問は「近代以降の文章」及び「実用的な文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。

受験者は「現代文型」「現代文・古文型」「現代文・古文・漢文型」から1つ選び、解答用紙裏面の指定欄にマークしなさい。

※大学が指定する選択型(特定分野)のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。

- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

- 4 解答用紙の問題番号に対応した解答欄にマークしなさい。例えば、第2問の

1

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように問題番号 2 の解答番号 1 の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

2	解 答 欄								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨

この注意事項は、問題冊子の裏表紙にも続きます。問題冊子を裏返して必ず読みなさい。

この試験は厳正に実施しています。問題・解答などを事前に配布・公開する行為は、重大な妨害行為になります。万一、このような行為が行われた場合は、法律により処罰されることがありますのでご注意ください。

第1問

次の「文章Ⅰ」と「文章Ⅱ」は、様々な状況において人間が抱く「バイアス」とは、日本語で「偏見」や「先入観」と訳され、考え方や意見に偏りを生じさせるものである。これらを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

【文章Ⅰ】

リスク分析の分野では、科学的なリスク評価と人々のリスク認知とに乖離^{かいり}があることが、Aリスク・コミュニケーションの必要性を意識させる一つのきっかけとなってきた。科学的なリスク評価では、「ハザード」^{（注1）}と「起こる確率」の積でリスクを計算

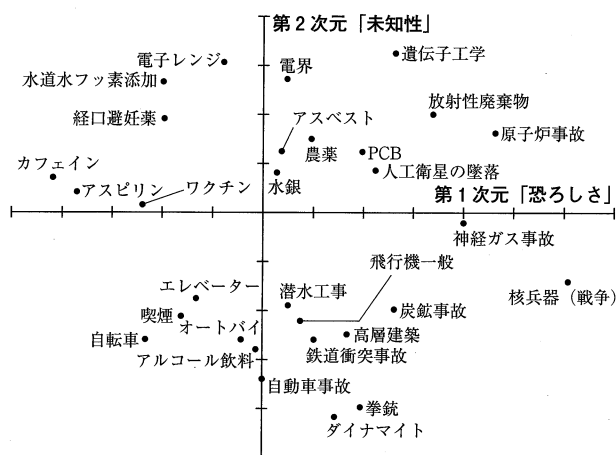


図1 人々によるリスク認知の評価基準

するが、人々はどうした計算によってリスクを認知しているわけではない。たとえば、自分がよく知らないものについてより怖いと感じたり、自然なものよりも化学的に合成されたもののほうがよりリスクがあると感じたりすることはあるだろう。また、普段はあまり地震のことを考えていなくても、大地震が起こった後であれば、地震に対するリスク認知が高くなり、加入していなかった地震保険について調べたりするようになるかもしれない。

このように人々は、多様な評価基準を用いて、リスクについて評価を行っている。それらの基準は科学的なリスク評価には含まれないものだから、専門家のリスク評価とは違いが生じてくる。この問題については、一九七〇年代から一九八〇年代にかけて、多くの研究が行われてきた。以下では、二つの代表的な研究を紹介しよう。

図1は、たくさんのハザードについて、人々がどのような評価基準で評価して

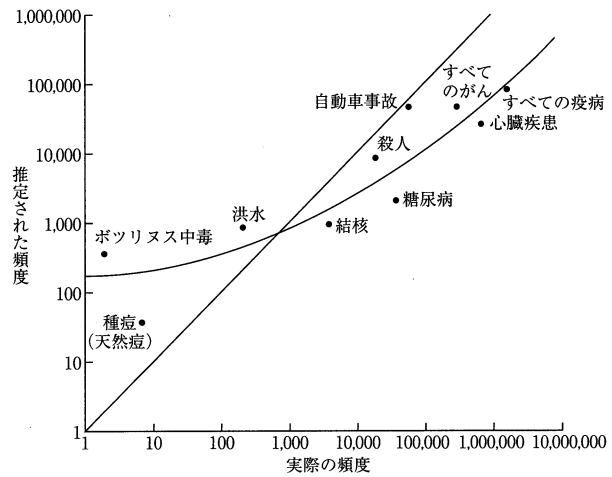


図2 人々による死因の推定と現実の頻度

いるかを調べるために、多くの評価基準で評価させたうえで、それを二つの主要な要因（次元）という）にまとめたものである。元の研究では、八一個のハザードについて評価させているが、ここでは図を見やすくするために、代表的なハザードだけケイ（ア）サイしている。X軸にあたる第一次元は「恐ろしさ」、Y軸にあたる第二次元は「未知性」の要因を示す。評価に用いられた基準のうち、「恐ろしさ」の基準に含まれていて、それが高く評価されているものには、「一度に多くの人が亡くなる」「将来世代への影響がある」「制（イ）御可能性が低い」などがある。「未知性」に含まれるもので、高く評価されるものには、「影響が後の世代に出てくる」「なじみのない新しいリスクである」「科学的に未知である」などがある。

また、一年間にどのくらいの人がある原因で亡くなっているのかを、四〇個の死因について推定させた結果を示したものが図2である。

ここでも見やすくするために、一部の結果のみを図示している。横軸は現実の頻度を、縦軸は人々が推定した頻度を、それぞれ示している。もし、現実の頻度と人々の推定が一致しているならば、直線上に点が示されるはずだが、実際には、人々の推定は少し斜めになった線上に乗っている。

現実の死因の頻度推定や、リスク認知の基準の相違以外にも、リスク評価とリスク認知との間にはずれが生じうる。これらはいずれも「リスク認知のバイアス」と呼ばれることが多く、このバイアスを是正することが当初のリスク・コミュニケーションの役割として期待されていたわけである。つまり、バイアスが生じるのは人々が科学的な知識を欠いているためなのだから、情報を伝えて、人々の知識を専門家のそれに近づければ、バイアスは是正されるはずだという考え方である。

このような考え方を「欠如モデル」ということがある。専門家や行政が「リスク・コミュニケーション」と称して、しばしば

一般市民を教育するような一方的な説明や広^(ウ)報をするのは、それが市民の「バイアス」であって、正すべきものであるという信念に基づいているようにみえる。

しかし、リスク認知が主観的なものである以上、科学的なリスク評価と異なるのは当然であり、それは単に、人々が科学的なリスク評価と異なる基準を用いて判断していることを示すにすぎない。また、各人は異なる価値観をもっているのだから、人によって、重視すべきと考えるリスクが異なるのも自然である。

むしろ、ここで示されている差は、「バイアス」という用語で説明するよりも、所属する集団や、個人の価値観により「差異がある」というふうに理解したほうがよいだろう。なぜならば、同じリスク評価をもとにしている専門家どうしであっても、リスク認知に違いがあることがわかつているからである。それについて、次に説明しよう。

少し古いものだが、化学物質のリスクについて、化学製品を扱うイギリス企業の上級管理職と毒物学会会員、そしてカナダの一般市民とを比較したマーツらの研究がある。^(注2)その結果、化学製品会社の上級管理職は、喫煙のリスク以外はリスク認知が低く、毒物学会会員と比べても、また、カナダの一般市民と比べた場合にはさらに^(エ)ケン^(エ)チ^(エ)ョに、リスク認知が低いことがわかった。特に興味深い結果は、毒物学会会員のリスク認知である。政府や企業に所属している会員は化学製品会社の上級管理職と同様にリスク認知が低かったが、アカデミックな場に所属している会員は彼らよりもリスク認知が高かった。つまり、所属する職業集団によって、リスク認知に差があったのである。

マーツらは、これを「リスク認知の文化差」と呼んでいるが、その「文化」には、「性別、民族、社会的地位、年齢、職業集団、職業的志向」など、さまざまなものが含まれる。^(注3)

日本においても、小杉らが、バイオテクノロジーと原子力発電について、一般市民と専門家のリスク認知を調査している。その結果、両者に違いがあっただけではなく、専門家どうしてもリスク認知に違いが見られることがわかった。すなわち、バイオテクノロジーについても原子力発電についても、一般市民のほうが専門家よりもリスク認知が高かったが、専門家を大学教員と研究所の職員（電力中央研究所職員）とに分けたところ、原子力発電については、研究所の職員よりも大学教員のほうが危険だと認知していた。これは、先ほど紹介したマーツらの研究結果と一致する。

さらに、小杉らは、専門家を専門分野ごとに分けて、リスク認知の差異を検討することも行っている。テーマは遺伝子組換え食物と原子力発電である。どちらに対しても一般市民のリスク認知が一番高かったが、遺伝子組換え食物については、バイオ専門家（日本分子生物学会と日本育種学会の会員）のリスク認知が最も低く、原子力専門家（日本原子力学会の会員）のリスク認知は高かった。これに対して原子力発電のリスクについては、原子力専門家のリスク認知が最も低く、バイオ専門家のリスク認知は、一般市民とほぼ同じ程度に高かった。

このように、一口に「専門家」と言っても、分野によってリスク認知に違いがある。さらに、同じ分野の専門家どうしであっても所属によって違いがあるという事実は、非専門家である一般の人々のリスク認知について、その「リスク認知のバイアス」を是正するためにコミュニケーションを用いる、という発想が明らかに的外れであることを示している。

つまり、知識や教育はもとより、その人の所属する組織や分野、価値観によってリスク認知が異なるのはむしろ当然であり、それを「バイアス」と呼ぶのはそもそも不適切といえよう。むしろリスク認知には差異があることを認めたくて、どのようなコミュニケーションのあり方が望ましいのかを考えていくべきであろう。要は、誰のリスク認知が正しいかという問題ではないということだ。

社会をあたかも学校のように考えて、先生である専門家が、生徒である非専門家を教え導く、という考え方に囚われている専門家が多いが、社会は学校ではないのだから（そもそも学校であっても、先生の考えに生徒や学生がすべて従うというものではないだろう）、必ずしも専門家の意見に従う必要はない。専門家の意見は参考にすることはあっても、市民一人一人が自ら考えて主体的な選択をするほうが望ましいのだ。

（吉川肇子『リスクを考える 「専門家まかせ」からの脱却』による）

（注） 1 ハザード——危険や危機、障害のこと。または、それらを生じさせるもののこと。

2 マーツ——C・K・マーツ。アメリカの心理学者。

3 小杉——小杉素子。心理学者。

【文章Ⅱ】

目を開き、耳をそばだてれば、現実はあるのまに見える。普通、そのように感じがちですが、実際にはそうでもありません。私たちの見え方は、かつて人間が暮らしていた自然のなかで、生き残りに必要なかたちで周囲の状況を認識できるよう選択・加工されたものです。

そして、C 自分の周囲の現実を認識するときにも、私たちは、頭のなかにある知識、期待、思い込みなどをフィルターとして、目の前の世界からくる情報をふるいにかけてうえて世界を認識しています。これは少し困ったことのようにも思えますが、逆に、認識のための枠組みや知識がまったくなかったとすれば、私たちは現実を認識することもできないでしょう。このような知識は、心理学では「スキーマ」と呼ばれています。私たちは自分にとってなじみのある世界や状況だと、スキーマを使つてうまく、かつすばやく状況を認識できます。しかし、初めての状況や場所では、スキーマがないために状況を理解するのに時間がかかったり、時間をかけてもうまく飲み込めないことがあります。

このように、私たちが自分なりに現実を認識するための知識、そしてそれを現実にはめていく方法は、周囲を認識するために必要なものですが、バイアスとして働くことがあります。そういったバイアスの一つとして、確証バイアスから見ていきましょう。

確証バイアスは、仮説が本当かどうか検討する際のバイアスです。仮説というと、まず思い浮かぶのは科学研究でしょう。研究するには仮説を立て、観察し、仮説が現実と合っているかを検証します。仮説と観察結果が合わなければ、仮説を作り直してまたやり直します。ビジネスでもこれを応用して、事業上の課題の解決策について仮説を立て、(オ)シサクを行い、結果を観察し、仮説を修正する、ということが行われます。

しかし、研究やビジネスなどの意識的な取り組みでなくとも、私たちは通常身の回りのことについて予測しながら認識しています。

たとえば物語を読んでその内容を理解するときには、次にどのような話がくるのかを予測しています。予測に基づいて文字や単語を認識するだけでなく、話のなかに出てくる人物の行為の意味を理解したり、筋を追ったりしています。

このように、予測することは私たちににとって不可欠と言えますが、予測に強く縛られすぎると、自分が予測したことを相手が言っただけかと思ひ込むなど、間違った認知の原因になることがあります。

「確証バイアス」における仮説というのは、科学研究の仮説のような難しいものだけでなく、私たちが普通に持っている予想や期待と言いかえることもできます。こういった予想や期待は、持っていることを自覚していなくても、大きな影響があります。というのも、私たちは、自分が知らず知らずのうちに持っている思い込みをもとに、それに合う事実を無意識に選択して認知するからです。そして、無意識に選択した事実を頭のなかに取り込んだうえで、「ああやっぱり自分の思っている仮説は正しいんだな」と自分の信念を強化します。

たとえば、あなたが「日本では離婚が多い」と思っているとしめます。それは自覚的に思っているでもいいですし、特にそのようなことを意識的に考えていなくとも、毎日そういった内容のニュースに多数接しているという場合でもかまいません。

そのような思い込み（仮説）があると、自分の周囲の情報、たとえばインターネット上の情報や新聞を見たときに、有名人のだけそれが離婚したという情報や、定年まで頑張ってきた元企業戦士が定年後に熟年離婚の憂き目にあったというストーリーなどが目につくようになります。ネットニュースや新聞などの情報源のなかから、自分の仮説を肯定するような情報を無意識に選択するので。それによって自分の仮説は正しいと感じます。

（かじたまさひろ 藤田政博『バイアスとは何か』による）

問 1 次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) 傍線部(ア)・(エ)・(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号

は ①
③。

(ア)

- ① 多額のサイムを負う
② 個人のサイリヨウで判断する
③ セキサイリヨウが限度を超える
④ 彼はイサイを放っている人物だ

(エ)

- ① 厳しいケンエツが行われる
② 先日の証言とは大きなケンカクがある
③ 神の啓示がケンゲンする
④ 理不尽なケンギをかけられる

(オ)

- ① シホウの判断を仰ぐ
② 新たな条例がシコウされる
③ シゴク当然な判決だ
④ ガクシをローンで借りる

(ウ)

				5	広報
④	③	②	①		
吉報	果報	報復	報酬		

(イ)

				4	制御
④	③	②	①		
防衛	崩御	統御	還御		

(ii) 傍線部(イ)・(ウ)と同じ意味を持つものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

4	・	5
---	---	---

問2

傍線部A「リスク・コミュニケーション」とあるが、これに対して筆者はどのような意見を述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① リスクは「ハザード」と「起こる確率」の積で算出できる単純なものではなく、人々がどのような基準でリスク認知を行っているのか、入念にコミュニケーションを繰り返すことで明確化しなくてはならない。
- ② リスク認知は、たとえ専門家どうしても所属する組織や分野によって差異が見られるものであるから、重要なのは一人一人が自ら考えてリスク評価に基づいた認識を心がけることである。
- ③ 科学的なリスク評価と市民が抱くリスク認知との間には観察可能なほどのずれが存在するため、適切なコミュニケーションによってこれを是正することが、ハザードの回避につながる。
- ④ 個々人が有する主観や価値観によって、リスク認知が異なるのは当然のことであり、今後はそれを考慮した上で有効なコミュニケーションの形態について考察していくことが必要である。
- ⑤ どれほどバイアスの是正を図ろうとも、個人間のリスク認知の差異が埋められることはないので、積極的なコミュニケーションによって差異を相互に理解し合う試みが重要である。

問3 「文章Ⅰ」の図1と図2について述べた説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7。

- ① 図1より、リスク認知の評価基準を平均化すると、「未知性」の高いハザードは「恐ろしさ」も高く見積もられる傾向にあり、情報の少なさは恐怖と相関関係にあることがわかる。
- ② 図1より、日常的に使用されている機器や嗜好品（しこうひん）であっても、人体への影響が周知されていないものも多く、それらはしばしば恐怖の対象として人々に推定されていることがわかる。
- ③ 自動車事故などの、図1の第1次元において高いリスク認知がなされているハザードは、図2においても実際より頻度の高い死因として推定されている。
- ④ 図2によれば、がんや糖尿病などの完治が難しい病気による死因よりも、洪水や事故などの技術開発によって制御可能な死因は、実際より頻度を低く推定される傾向にある。
- ⑤ 図2によれば、死因は、現実の頻度が低いものは実際よりも頻度を高く推定されたり、逆に現実の頻度が高いものは頻度を低く推定されたりする傾向にある。

問 4

傍線部B「『リスク認知のバイアス』を是正するためにコミュニケーションを用いる、という発想が明らかに的外れである」とあるが、なぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

- ① 専門家は一般市民のバイアスを正すためにコミュニケーションを用いようとするが、所属する分野によってさえリスク認知に差がある以上、コミュニケーションを行う前提が成り立たなくなるから。
- ② 一般市民が抱えるリスク認知に関するバイアスは、それぞれの専門分野に所属する専門家たちの情報によって扇動されたために生じたものであり、コミュニケーションを行ってもバイアスの発生は阻止できないから。
- ③ 「リスク認知の文化差」が普遍的に存在する限り、専門家が一般市民に対してコミュニケーションを図っても、膨大な種類のリスク認知を一つの正しいリスク認知に統一することは至難の業であるから。
- ④ 一般市民のリスク認知を「バイアス」と呼ぶのはそもそも不適切であり、存在に確証の持てない対象を前提としたコミュニケーションは効果を期待できず、徒労に終わってしまう可能性があるから。
- ⑤ 性別や民族、社会的地位などの差異によってリスク認知にバイアスが生じることは避けられず、一般人は専門家の意見を参考にしつつも、各々が主体的に自身のバイアスを解消する努力をすべきであるから。

問5 傍線部C「自分の周囲の現実を認識するとき」とあるが、【文章Ⅱ】の筆者はどのような認識を紹介しているか。その説

明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 日常的な事象に対して自身が立てた仮説を検証する際に、仮説の正しさを覆すような出来事は意識的に事実を改ざんし、都合のよい出来事だけを揃^{そろ}えることで成立する認識。
- ② 周囲で起こる日常的な出来事を知覚する際に、あらかじめ自身が立てた予測の裏付けとなるような出来事を優先的に知覚し、それ以外の出来事を意識外に追いやってしまうような認識。
- ③ 人間が日常のさまざまな出来事に対して仮説を立て検証を繰り返すことによって育まれる、一定の枠組みや知識を判断のよりどころとして用いた、生活を円滑に送るための認識。
- ④ 普段目になっている報道の中でも、とりわけ刺激的な出来事を無意識のうちに優先的に尊重してしまい、それらの集積をもとにして誇張された印象を構築してしまうような認識。
- ⑤ 馴染^{なじ}みのない土地や経験のない出来事に対して、これまで自身が培ってきた思考のための枠組みや知識を当てはめ、適用できない部分は適宜修正を行っていくような認識。

問6 授業で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んだNさんは、内容をよく理解するために、次のような「フート」を作成した。本文の内容と「フート」を踏まえて、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

「フート」

●【文章Ⅰ】における「バイアス」の扱われ方

- ・ハザードに対するリスク認知を行う際の、個人間の差異として説明されている。
- ・「性別、民族、社会的地位、年齢、職業集団、職業的志向」の違いによって、バイアスが発生する。

●【文章Ⅱ】における「バイアス」の扱われ方

・

X

●【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】との共通点

- ・「バイアス」を、個人を取り囲むさまざまな環境の影響によって発生するものとして考察している。

●【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】との相違点

- ・Y「一般人が「バイアス」に対して取るべき向き合い方については、それぞれの著者は異なる見解を抱いている。」

(i) 空欄 **X** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **10**。

- ① 人間の現実認識の仕方に関する、さまざまな専門分野の科学者たちによる入念な観察と仮説、検討の繰り返しによって生成された理論として紹介している。
- ② 自分自身が立てた予想の実現を期待するあまり、心理学的には非合理的ともいえる認知を行ってしまった結果生じるものとして説明している。
- ③ 個々人が現実を効率的に認識するための知識や、それを現実世界に適用していくための方策の延長上にあるものとして位置付けている。
- ④ 日常の場面における認識を援助する「スキーマ」が十分に発動しない結果、個々人の認識にもたらされてしまうものとして見なされている。

- (ii) 傍線部Yに関して、「文章Ⅰ」および「文章Ⅱ」の内容を踏まえた説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

①【文章Ⅰ】では、専門家によるリスク・コミュニケーションの効果を疑問視しているのに対し、【文章Ⅱ】ではむしろ専門家としての立場から、一般人向けに正しい「バイアス」との向き合い方を紹介している。

②【文章Ⅰ】では、「バイアス」の存在を積極的に受容し、その存在を認めたくえでの向き合い方を啓蒙^{けいもう}しているのに対し、【文章Ⅱ】では「バイアス」が正しい認識を妨げるものであることを危惧している。

③【文章Ⅰ】では、一般人のみならず科学者組織の内情にまで踏み込んだ産業社会学的な考察を行っているのに対し、【文章Ⅱ】ではあくまで一人の心理学者としての独自の研究結果の説明に終始している。

④【文章Ⅰ】では、「バイアス」を、ハザードに対するリスク認知におけるものに限定しているのに対し、【文章Ⅱ】では、ハザードのみならず日常的な事象をも含めた出来事に対するものとして説明している。

国語の問題は次に続く。

第2問

次の文章は、若くして病死した俳人・歌人の正岡子規をモデルにした伊集院静の小説「ノボさん」(二〇一三年発表)の一節で、夏目漱石との交流の様子を描いた部分である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

子規は漱石の娘の祝いの雛(注1)に添えた手紙に、絵を君に送ってやりたいが大事なものを割愛してかえって笑われるのも引き合わないとやめている。しかし六月にあずま菊を花瓶に活けた絵を送り、そこに短歌を書いている。その短歌の一節に、「火の国に住(注2)みける君の帰りくるかね」とある。

これは六月に漱石が文部省からイギリス留学を命じられたことを知っていたからだろう。子規は漱石のイギリス留学を新聞の記事で知った。

A 子規は漱石の渡欧の報せをいかなる心境で読んだのであろうか。

好奇心が人の何倍もある子規がヨーロッパへ行きたくないはずがない。(注4)松山中学校時代に周囲の仲間が次から次に上京するのを見て、何度も東京の叔父の加藤拓川(注5)にあてて上京したいことを手紙に書き、なかなか許しの返書が届かないので家族にも親戚にも内緒で松山中学校を退学してしまったほどの気性である。その拓川も子規が上京するやすぐにフランスに留学した。子規はいずれ自分もそうしたいと思ったはずである。(注6)

浅井忠もヨーロッパへ勉学に出た。(注6)

浅井から家が空になるのと大きな鳥籠をもらったばかりの春である。

ただ自分の身体が渡欧の船旅に一日も耐えられないことは子規が一番よくわかっていた。

七月二十三日の早朝、子規庵(注7)に寺田寅彦がやってきて、漱石が帰京しイギリス留学の出発日が決定したことを告げた。子規は静かにうなずいた。

帰京してからの漱石は渡欧の準備に追われていた。

漱石はこのイギリス留学をもろ手を挙げて受け入れたのではなかった。文部省の留学命令の目的が「英語研究」であることが気に入らなかった。彼に言わせれば英語をマスターしにイギリスに行くのではなく「英文学」を学べというなら納得できる。それでも日本で数人の者しか留学には選ばれない、新聞紙上に発表される栄誉である。彼は受け入れた。

二十三日の夕刻、漱石が子規を訪ねてきた。

(注8)

八重と律^{りつ}が迎えた。二人は子規がどれほど漱石のことを思っているかを知っていた。

(注9)

根岸の家に松山から移り住んできた時、いち早く様子を見に来てくれたのが漱石であった。東京のことが何もわからない二人にやさしく声を掛けてくれたのを二人はよく覚えていた。まだ学生の時に松山の家に遊びに来た日のことも鮮明に二人は覚えていた。

漱石が訪ねてくるとわかった時、子規は二人に漱石がいかに優秀な学生かを話してくれた。

(注10)

「夏目金之助君は帝大で一番頭が良い人ぞなもし」

子規のその口振りから、いかに子規が漱石のことを大切にしているかがわかった。

手紙ひとつにしても漱石から届くと子規は顔色が明るくなる。

「ご無沙汰しています。お元気でしたか」

漱石が二人に言った。

「はい。お蔭^{かげ}さまで。夏目さんもご立派になられて、お子さまがお生まれになっておめでとうございました」

いつも身綺麗^{みきれい}にしている漱石だが今日の前に立っているのは文部省の給付でイギリス留学が決まった学士さまである。貫禄^{かんろく}さえ感じられる。

「節句にはご丁寧なものを頂きありがとうございます」

「奥さまもお嬢さまもお元気ですか」

「はい。長旅にも疲れず元気に帰京してくれました」

「さあどうぞ」

「大将は元氣ですか？」

漱石が笑つて子規のことを大将と呼んだ。

「ええ、今朝、寺田さんがあなたがみえることを報せに来て下さいましたから楽しみにしています」
奥へ上がると玄関先での声が聞こえていたのか子規が起き上がろうとしていた。

「ああかまわない。そのまま置いてくれたまえ」

「いや、今、いい塩梅あんばいの歌がひとつ浮かんだので書きとめようと思つていたところじゃ」

「そうかね、それは上首尾だね」

子規は肘掛けに片肘ついて枕元の半紙と筆を取り、そこに歌を書きとめた。

「どうぞな？」

子規が半紙を漱石に差し出した。

漱石は半紙を受け取り、手紙で何度も見てきた子規の筆文字を見つめた。懐かしいような気持ちがあった。美しい筆致である。

漱石は子規の筆の字が好きだった。悪筆の自分の字とは比べものにならないほど、子規の字には品格があった。B 文字を書いて生さるべき字に思える。

出逢あつた当初、漢籍の話になり、訪ねた常盤会ときわかい寄宿舎の部屋でさらさらと五言絶句を見せてくれた時は驚いた。自分と同じ歳の学生が、先刻までの二人で寄席をひやかしに行こうと散策していた様子を漢詩にしていた。その上一氣に書いた字がまことに美しかった。

只者ただものではないと思つた。

そんな昔のことが思い浮かぶ子規の字であつた。

そこに書きとめられていたのは俳句ではなく短歌だった。

「この頃は短歌がお盛んなようだね。あのなかなかのあずま菊にもあったね」
(注13)

「いやお恥しい。戯れことぞな」

子規の伊予訛^{いよなま}りを聞くのもひさしぶりだった。
(注14)

「出発の日は決ったかね」

「九月の上旬になるのだろうが、まだ船も決っていないようだ」

「どのくらいかかるものかね、イギリスまでは」

「四十五日から五十日と聞いている。天候の加減でもととかかる時もあるらしい」

「そうかね……」

それっきり子規はイギリス留学の話はしなかった。

一年前からはじめた文章会の話になった。

「この頃、写生というものがようやくわかったぞなもし。目に見えるものを正確に文章にすることはまずは何より大事なことじゃが、さらによく見てみると人それぞれの見え方が違うとぞな。そこに凡人は気が付かない。蕪村^{ふそん}の句を見るとやはり見方があきらかに違うとぞな。浅井先生も不折^{ふせつ}も言うとしたが、自分の目に見えるものが大切じゃと。それが善^よし悪^あしの決めのようじゃ。正確に写しとるということは見たままを描くいうこととはまるで違うもんじゃ。それは……」

子規は一方的に話をしている。漱石はそれを黙って聞いている。三年ぶりの二人の会話である。子規は自分の病状の話はしない。漱石も聞かない。手紙の中で十分に話しているし、弱音を吐く自分を見られたくない。また、そんな子規を漱石も見たくない。

話がひとくぎりついた頃、漱石が、そろそろいとまをしよう、と言った。

「そいか」

子規は漱石の顔を見た。

その目が何かを訴えている。

「出発が決つたら挨拶に来よう」

「そいか」

八重と律が漱石を表まで見送った。

律が茶を下げに行くと、C 子規はじつと庭先を見つめていた。

八月に入つての早朝、子規は喀^{かつ}血した。

子規はその血を見ながらあらためて自分の身体をむしばんでいる病巢の大きさを思った。それは八重も律も同じだった。

子規は数日、来客も断^{こと}わつて休んだ。

喀血の兆候がないので六日後、短歌会を開催した。

八月二十六日、漱石が寺田寅彦とともに挨拶にあらわれた。

子規はいたって平静に漱石を迎えた。

それは漱石も同じだった。

話題はもっぱら寅彦の勉学振りのことになった。

寅彦が恥じらいながら己の勉学の話をするのを子規も漱石も黙って聞いていた。

子規はこれが漱石に逢う最後だとわかつていた。

留学は二年と聞いたが、船旅の日々やさまざまな準備を考えると二年半はかかるだろう。

二年半生きながらえることは無理である。漱石は彼の人生の目的のために渡欧するのである。別れを惜しむことより、むしろ

祝うべきなのだが子規にはそれができなかった。

「それでは……」

漱石が言い、子規は、

「そいか」

とだけ言い、立ち上がった漱石を見た。

漱石も一瞬子規の顔を見た。笑って見せたかったができなかった。ぎこちない表情だけが二人の顔に浮かんでいた。

(注) 1 祝い雛——女の子の誕生を祝い、初節句(雛祭り)に雛人形を贈る風習。

2 あずま菊——キク科の多年草。

3 火の国——熊本県。このときの短歌は、「あづま菊いけて置きけり火の国に住みける君の帰りくるかね」で、熊本で教師をしていた漱石が渡欧のために帰京し、再会できるのを待ちわびていることを詠ったもの。

4 松山中学校——愛媛県松山市に生まれた子規の母校。

5 加藤拓川——本名は加藤恒忠。外交官、政治家(一八五九—一九二三)。

6 浅井忠——明治時代の洋画家、教育者。子規に絵画を教えた(一八五六—一九〇七)。

7 寺田寅彦——物理学者、随筆家、俳人で、漱石と子規に共通する東京帝大時代の後輩(一八七八—一九三五)。

8 八重と律——八重は正岡子規の母、律は妹。

9 根岸——東京都台東区の名。子規が松山から東京に住んだときの家のあった地で、現在も子規庵として残されている。

10 夏目金之助——漱石の本名。

11 帝大——ここでは東京帝大(現在の東京大学)。

12 常盤会寄宿舎——旧松山藩が設立した、東京にある学生寮。子規も一時寮生として住んでいた。

13 なかなかのあずま菊——子規が短歌を添えて漱石に送ったあずま菊の絵(注2、3参照)。

14 伊予訛り——伊予(現在の愛媛県)特有の言葉遣い、発音。

15 不折——中村不折。洋画家で、子規、漱石とも親交があった(一八六六—一九四三)。

問1

傍線部A「子規は漱石の渡欧の報せをいかなる心境で読んだのであろうか。」とあるが、どんな心境だったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

12。

- ① 一時は目指していた渡欧を漱石が実現することに驚くとともに、友人と別れる悲哀を一瞬感じたが、冷静さを取り戻し、心の動揺を恥ずかしく思った。
- ② 好奇心が旺盛で一度は渡欧を目指したものの、病氣のことを考えるとあきらめざるをえなかった、そうした事情を漱石に語る機会を設けたいと思った。
- ③ 漱石が渡欧することはうらやましくはあるものの、病身の自分としては、漱石が帰京した際に再会を果たせることに喜びを見出した^{いだ}と思った。
- ④ 叔父と同じように渡欧することを考えたが、体調のために断念せざるをえなかった、そのときの無念を漱石が晴らしてくれ^くることを期待したいと思った。
- ⑤ 渡欧に耐えられる身体ではないことを悟っていたため、漱石の渡欧に心を動かすことはなく、淡々とした態度で漱石の旅立ちを祝い、送り出そうと思った。

問2 傍線部B「文字を書いて生きるべき字に思える。」とあるが、これはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

13。

- ① 子規が書いた筆文字は、あたかも子規の生命そのものであるかのような雰囲気をもっているということ。
- ② 文字の魅力というものは、子規が紙の上に筆でじかに書いてこそ生き生きとしたものになるということ。
- ③ 文字にすると一般には言葉の生命力は失われるが、子規が筆で書くなら生命力が復活するということ。
- ④ 子規が筆で文字を何気なしに紙の上に書いただけで、その筆跡が生き物のように思われてくるということ。
- ⑤ 子規が筆文字を書くとき、その文字が紙の上に自然に出現してきたような生命力が感じられるということ。

問3

傍線部C「子規はじつと庭先を見つめていた」とあるが、このときの子規の思いの説明として最も適当なものを、次の

- ① ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 久しぶりに漱石と再会し、会話を交わすことができたことに満足しながらも、お互いに腹の底をさらけ出さずに別れたために徒労感に襲われている。
- ② 渡欧の機会を手にした漱石の晴れやかな姿を垣間見て、自分の悲惨な病状が強く実感され、これまで必死に排除してきた絶望的な思いに囚われている。
- ③ 虚勢を張って自分の苦しい心の内を漱石に語らずに、写生の話に終始していたことを振り返り、貴重な時間を無駄に過ごしたという後悔の念が募っている。
- ④ 再び出発前に挨拶に来るといふ漱石の言葉を何度も反芻し、そのときの自分の対応を想像するうちに、友情というものはかなさが意識されている。
- ⑤ 渡欧を間近に控えた漱石の充実した今後と比べたとき、次第に死が忍び寄ってくる自分の命の行方も同時に実感されてきて、茫然とした状態である。

問4 この文章における表現の特徴についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の

順序は問わない。解答番号は

15

16

。

- ① 子規と漱石の内面描写や情景描写を意図的に避け、二人の高名な文学者の実際の足跡を正確に再現するという手法を守って、歴史的な説得力に富んだ重厚な文体を作っている。
- ② 別れを前にした子規と漱石の複雑な心模様を中心に描きながら、彼らの背後にいる八重と律、寺田寅彦などの人物にも目を配ることで、作品に具体的なリアリティをもたらしている。
- ③ 漱石の問いかけに対して「そいか」という素っ気ない返答を子規に繰り返させることで、自分の考えや悩みを隠し、余計な心配をさせまいとする子規の細かい配慮が強調されている。
- ④ 子規と漱石が再会する場面と二人が過去を回想する場面とを交差させ、時には自由な虚構や想像を加えることによって、二人の文学者の新しい人間像を浮き彫りにしている。
- ⑤ 漱石の発言は少ないのに比べ、子規が伊予訛りの言葉で饒舌に話す様子からは、子規の当時の心境に読者が感情移入しやすいようにするための工夫がうかがわれる。
- ⑥ 子規と漱石に関して、史実に即した場面を展開しようと心がけているにせよ、そこに作者なりの解説や感想も適度に挿入しながら二人の交流の様子を描いている。

問5

次の【資料Ⅰ】は波線部「あずま菊を花瓶に活けた絵」について、後日、漱石が記した「子規の画」の一節である。漱石のこの絵に対する思いとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

【資料Ⅰ】

子規は人間として、また文学者として、最も「拙」の欠乏した男であった。永年^{えいねん}彼と交際をしたどの月にも、どの日にも、余はいまだかつて彼の拙を笑い得るの機会を捉え得た^た試がない。また彼の拙に惚^ほれ込んだ瞬間の場合さえもたなかった。彼の歿^{ぼつ}後ほとんど十年になるうとする今日、彼のわざわざ余のために描いた一輪の東菊^{あずまぎく}の中に、確^{たしか}にこの一拙字を認める事のできたのは、その結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余にとっては多大の興味がある。ただ画がいかに淋^{さび}しい。でき得るならば、子規にこの拙な所をもう少し雄大に發揮させて、淋しさの償^{つぐない}としたかった。

- ① 子規は病氣にも真剣に立ち向かい、句や歌については才能を開花させたが、東菊の画だけは不出来で淋しいものだった。とはいえ、そこに子規の人間味が含まれており、作品として結実してほしかったと思っている。
- ② 子規は人間としても文学者としても比類ない才能を發揮したが、送られた東菊の画だけは貧弱な印象を受けた。子規が生きながらえ、その短所を長所に上達させれば、自分の淋しさは取り払われただろうと思っている。
- ③ 子規は何事もそつなくこなし、句や歌も非の打ち所はなかったが、東菊の画だけは何の才能も感じられなかった。ただし、今となつてはそうした欠点がかえって印象に残り、大いに努力し、喜ばせてほしかったと思っている。
- ④ 子規は病人としての弱みを見せずに、優れた字や句、歌を残しているが、東菊の画だけは下手なものだった。可能なら、そうした拙さが、かえって淋しさを解消してくれるものになってほしかったと思っている。

問6 次の【資料Ⅱ】は、秋尾敏^{あきお びん}『子規の近代』の一節である。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料Ⅱ】

近代都市東京は、西洋文明からの情報を、現実世界に具現化しつづける街であつた。それは人々の内面のイメージを外化し、物質化する街と言つてもよい。そこでは新しい価値観と新しい感性が追い求められ、人々が子供のころに包み込まれていたなつかしい日本の原風景は、次々に否定され、塗りつぶされていく。

子規もまた近代の住人として、東京で働き、近代の病^{やま}いに蝕^{むしば}まれていた。それは慣れ親しんだ松山の母語による世界認識と、新たな近代の世界認識とのずれからくるストレスなのである。強^{きやうじん}靱^{じん}な子規の精神は、自己の疲弊を自覚することがなかったようであるが、その肉体と魂は傷つき、安らぎと癒^いしを求めていたと考えられる。

X

いったい子規以前の誰が、このようにつまらない風景を、これほど率直、単純に句にする道を選びえたろうか。

(i) 空欄 **X** に入る俳句として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **18**。

- ① 鐘つきはさびしがらせたあとさびし
- ② のどかさや障子の穴に海見えて
- ③ 駄菓子売る茶店の門の柿青し
- ④ まづ青む彼岸桜のつばみ哉^{かな}

(ii) 【資料Ⅱ】では、子規の俳句についてどう考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **19**。

- ① 子規の俳句は、近代の住人として、東京で働き、病いに蝕まれていた彼が、近代都市東京を否定し、故郷松山の原風景へと回帰したいという衝動を内包していた。
- ② 子規の俳句は、故郷の風景、風物につながる平凡だが懐かしい対象をとらえることで、近代的な認識とのずれからくるストレスを解消したいという意図を持っていた。
- ③ 子規の俳句は、西洋文明からの情報を外化し、物質化しつづける東京の街に抵抗するため、新しい価値観と新しい感性を追い求めて得られた安らぎと癒やしの具現化であった。
- ④ 子規の俳句は、人々の内面のイメージを外化し、物質化する西洋文明からの影響の下で、故郷で見た日本の原風景を強靱な精神によって復活させるための作業だった。

国語の問題は次に続く。

第3問

次の【文章Ⅰ】は、鎌倉時代の評論『無名草子』の一節で、数人の女房が、平安時代初期の女性歌人小野小町について語り合っている場面である。また、【文章Ⅱ】は、江戸時代に書かれた『百人一首一夕話』の一節で、これも小野小町について述べている。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点 50）

【文章Ⅰ】

A 「^(ア)色を好み、歌を詠む者、昔より多からめど、小野小町こそ、みめ、かたちも、もてなし、心遣ひよりはじめ、何事も、いみじかりけむとおほゆれ。

X わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらば往なむとぞ思ふ

Y 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

と詠みたるも、女の歌はかやうにこそとおほえて、そぞろに涙ぐましくこそ」と言へば、また、

B 「老いの果てこそ、^(イ)いとうたてけれ。さしもなき人も、いとさまであることやははべる」と言ふ人あれば、

C 「それにつけても、憂き世の定めなき思ひ知られて、あはれにこそはべれ。^(カ)屍になりて後まで、

秋風の吹くたびごとにあな目あな目小野とは言はじ薄生ひけり

など詠みてはべるぞかし。広き野の中に薄の生ひてはべりける、かく聞こえたるなりけり。いとあはれにて、その薄を引き捨てはべりける夜の夢に、『小野小町と申す者の頭なり。薄の、風に吹かるるたびごとに、目の痛くはべるに、引き捨てたまひたるなむ、いとうれしき。この代はりには、歌をいみじく詠ませたてまつらむ』と見えてはべりけるとかや。かの夢に見たる人は、^(注1)道信中将と人の申しはべるはまことにや。色をも香をも、心に染むとならば、かやうにこそあらまほしけれ」と言ふ。

（注） 1 道信——藤原道信。中古三十六歌仙の一人。

【文章Ⅱ】

業平朝臣、二条后のいまだただ人にておはしましたる時、盗み出でて行きけるを、兄上たち留めて取り返されたる由、『伊勢物語』に書けるが、『日本紀式』といふものにあるやうは、かの兄上たち后を取り返し給ふ時、憤りやすめがたくて、業平の

髻を切りてけり。されど誰がためにもよからぬことなれば、人にも知らせず、心一つに思ひて浮かれありかれけるが、業平髪を生やさんとして籠もり居られたる間に、歌枕ども見んとて東の方へ行きけり。陸奥に到りて八十島といふ所にて宿りたる夜、野中に歌の上の句を詠ずる声あり。よくよく聞けば、

秋風の吹くにつけてもあな目あな目

と聞こゆ。業平怪しみて声する方を尋ね求むるに、人はなくて死人の頭一つあり。その髑髏の目の穴より薄一本生ひ出でたるに、風になびく音のかく聞こえければ怪しく覚えて、あたりの人にこのことを問ふに、ある人の言ふ「小野小町この国に下り、この所にて命終はれり。かの頭それならん」と言ふを聞きて、業平あはれに悲しく思はれければ、下の句を付けられたり。

小野とは言はじ薄生ひけり

とあり。怪しく論ずるに及ばぬ妄説なれど、古く言ひ伝へたるにや。

(注) 1 業平朝臣——在原業平。平安時代初期の歌人。『伊勢物語』の主人公のモデル。

2 二条后——藤原高子。清和天皇の女御。

3 『日本紀式』——不明の書物。

4 髻——頭上で束ねた髪。まげ。

5 陸奥——東北地方。「八十島」は、現在の秋田県にかほ市象潟町付近と考えられる。

問 1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20

22

(ア)

色を好み

20

- ① 美しい風景を愛し
- ② 情趣を好み
- ③ 恋人を選り好みし
- ④ 華美な装いを好み
- ⑤ 貴人を愛し

(イ)

いとうたてけれ

21

- ① とても貧しかった
- ② 痛々しく思われる
- ③ 非常に華々しい
- ④ たいそう嫌だ
- ⑤ ますます目立っていた

(ウ)

心一つに思ひて

22

- ① 熱心に考えて
- ② 孤独に感じて
- ③ 皆で示し合わせて
- ④ ひどく思い詰めて
- ⑤ 自分だけの心に納めて

問2 和歌X「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらば往なむとぞ思ふ」、和歌Y「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ

夢と知りせば覚めざらましを」の、それぞれの語句や表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

- ① 和歌Xの「うき」は掛詞で、「浮き草」の「浮き」と、「つらい」の意の「憂き」とを掛けている。
- ② 和歌Xの「往なむ」の「なむ」は、助動詞「ぬ」の未然形に、助動詞「む」の終止形が接続した状態である。
- ③ 和歌Yの「寝ればや」の「ばや」は、原因を示す接続助詞「ば」に、疑問の係助詞「や」が接続した状態である。
- ④ 和歌Yの上の句は「夢に愛しい人が見えたのは、その人を恋しく思いながら寝たからだ」という意味である。
- ⑤ 和歌Yの下句の「…せばくまし」は、「もし…であったなら、くだろう」と訳す、反実仮想の表現である。

問3 「文章Ⅰ」における、女房たちの発言A・B・Cについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は

24。

- ① Aの発言では、「小野小町は容貌や言動は素晴らしいが、歌風は弱々しい」と批評している。
- ② Bの発言では、「小野小町のような平凡な歌人がもてはやされるのは不思議だ」と非難している。
- ③ Cの発言では、「小野小町の末路を見ると、人の世の無常が思い知らされる」と述べている。
- ④ Cの発言では、「小野小町は、野中の死体に供養の歌を詠んでやるほど慈悲深かった」と伝えている。
- ⑤ Cの発言では、「小野小町を夢に見ると必ず和歌が上達するという伝説がある」と説明している。

問4 【文章Ⅱ】の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

25。

- ① 業平が高子を連れて逃げたのは、まだ高子が清和天皇のもとに女御として入内する前のことである。
- ② 高子の兄たちによって高子が奪還されてしまうと、業平は反省の思いを示すために自ら髪を切った。
- ③ 業平は切った髪を伸ばすために家に籠もっていた折に、一人で東北地方へ旅に出かける夢を見た。
- ④ 業平が野の鬺腰に問いかけると、鬺腰は「自分はこの地で命を落とした小野小町である」と答えた。
- ⑤ 業平が死後の小野小町と和歌で心を通じさせたというのは、古い言い伝えて信じるに足る話である。

問5 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後の話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

教師 いま二つの文章を読みましたが、【文章Ⅰ】の最後の女房の発言（Cの発言）と、【文章Ⅱ】は、いずれも「秋風の吹くたびごとにあな目あな目小野」と言はじ薄生ひけり」という和歌、もしくは「秋風の吹くにつけてもあな目あな目」な目」「小野とは言はじ薄生ひけり」という連歌が詠まれた事情について述べています。しかし、違う点もあって、それぞれ特徴がありますね。どのような違いがあるか、みんなで考えてみましょう。

生徒A 【文章Ⅰ】では、登場しているのが藤原道信だけど、【文章Ⅱ】では在原業平になっているね。それと、【文章Ⅰ】では、「秋風の」の歌は小野小町が一人で詠んだものということになっているけど、【文章Ⅱ】では、小野小町と在原業平の二人による連歌になっている。

生徒B 【文章Ⅱ】のほうは、「その髑髏の目の穴より薄一本生ひ出でたるに、風になびく音のかく聞こえけれ」とあるから、

X

ということだね。

教師 確かにそうですね。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】では、小野小町の登場の仕方にも違いがありますね。

生徒C そうか。

Y

と言えそうだね。

生徒A なるほど。単に登場する男性の違いや、和歌と連歌の違いということだけではないんだね。

教師 こうして丁寧に読み比べてみると、いろいろと面白い発見がありますね。

(i)

空欄

X

に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

26

。

- ① 髑髏の目の穴に薄が生えているのを気の毒に思っ、小野小町が「秋風の吹くにつけても、ああ目が痛そうだ、ああ目が痛そうだ」と詠んだということで、ここでは小野小町も業平と共に陸奥まで旅していた
- ② 髑髏の目の穴に薄が生えているのを気の毒に思っ、在原業平が「秋風の吹くにつけても、ああ目が痛そうだ、ああ目が痛そうだ」と詠んだということで、ここでは小野小町の髑髏に対して詠み掛けた
- ③ 髑髏の目の穴に生えている薄が風に吹かれる音が、在原業平には「秋風の吹くにつけても、ああ目が痛い、ああ目が痛い」と聞こえたということで、ここには小野小町は登場していない
- ④ 髑髏の目の穴に生えている薄が風に吹かれたので、死んだ小野小町が「秋風の吹くにつけても、ああ目が痛い、ああ目が痛い」と詠んだということで、ここでは小野小町は幽霊として登場している

(ii)

空欄

Y

に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

27

。

①【文章Ⅰ】では、死んだ小野小町が歌を詠み、夢に現れたことをさほど懐疑的でなく描いているが、【文章Ⅱ】では、死んだ小野小町が現れて歌を詠んだとは描かれておらず、そもそもありえない話だとしている

②【文章Ⅰ】では、死んだ小野小町が歌を詠んだり夢に現れたりしたことに極めて懐疑的であるけれど、【文章Ⅱ】では、死んだ小野小町が現れて何かしたということを、実際にあったこととして面白がっている

③【文章Ⅰ】では、死後も歌を詠んだという伝説を示すことで小野小町がいかに優雅な人であったかを言おうとしているけれど、【文章Ⅱ】では、同じ伝説が業平の優雅さを言うためのものとして紹介されている

④【文章Ⅰ】では、死後も歌を詠むことに執着したことが、小野小町の優雅さの証^{あかし}として述べられているけれど、【文章Ⅱ】では、同じく歌に執着したことが、小野小町が成仏できない理由として説明されている

国語の問題は次に続く。

第4問

次の「文章Ⅰ」は、漢の劉向の『説苑』の一節、「文章Ⅱ」は、その逸話について、唐の柳宗元が論じた「桐葉もて弟を封ずるの弁」の一節である。これを読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50）

「文章Ⅰ」

成王^(注1)与^(注2)唐叔虞^(注3)燕居^(注3)剪^(注3)桐葉^(注4)以^(注4)為^(注4)珪^(注4)而授^(注4)唐叔虞^(注4)曰^(注4)「余^(注4)以此封^(注4)汝^(注4)」唐叔虞喜^(注5)以^(注5)告^(注5)周公^(注5)周公以^(注5)請^(注5)曰^(注5)「天子封^(注5)虞耶^(注5)」

成王曰^(注6)「余^(注6)一^(注6)与^(注6)虞戲^(注6)也^(注6)」周公対^(注6)曰^(注6)「臣聞^(注6)之^(注6)天子無^(注6)戲言^(注6)言^(注6)則史書^(注6)之^(注6)」於^(注6)是遂封^(注6)唐叔虞^(注6)於^(注6)晋^(注7)周公可^(注7)謂^(注7)善説^(注7)矣^(注7)一^(注7)称^(注7)

而成王益^(注8)重^(注8)言^(注8)明^(注8)愛^(注8)弟^(注8)之義^(注8)有^(注8)輔^(注8)王室之固^(注8)

(注) 1 成王——周の武王の子。幼くして即位したので、周公が摂政をつとめた。

2 唐叔虞——成王の弟。まだ幼かった。

3 燕居——くつろぐ。

4 珪——天子が諸侯に封ずる証として授けた玉。

5 周公——武王の弟で、成王の叔父。周王朝の基礎を築いた聖人とされる。

6 史——天子の言動を記録する史官。

7 晋——国名。現在の山西省太原地方を中心とした大国。

【文章Ⅰ】

周公乃成^{シテ}其^ノ不^レ中^ル之^ヲ戲^シ、以^テ地^ヲ以^テ人^ヲ与^{ヘテ}小^ノ弱^者、^ニ為^{サバ}之^ガ主^ト、其^レ得^ン為^{スラ}聖^ト乎。且^カ周^ノ公^ノ以^テ王^ノ之^ハ言^ハ、不^レ可^カ苟^{シクモス}而^ノ已^{ミテ}、必^ズ從^{ヒテ}而^レ成^{サン}之^ヲ耶^カ。

設^ニ有^ル不^レ幸^ヲ王^ノ以^テ桐^ノ葉^ヲ戲^シ婦^ノ寺^ヲ、亦^モ將^シ拳^ヲ而^レ從^{ヒテ}之^ヲ乎。

凡^ソ王^ノ者^ノ之^ハ德^ヲ、在^リ行^フ之^ヲ何^ニ若^シ。設^シ未^ダ得^ズ其^ノ當^ラ、雖^モ十^ト易^{カフト}之^ヲ、不^レ為^サ病^ヲ。^(注5)要^{スル}於^ニ其^ノ當^{タルニ}、不^レ可^カ使^ム易^ヘ也。而^ル況^{ンヤ}以^テ其^ノ戲^シ乎。若^シ戲^{シテ}而^レ必^ズ行^{ハバ}之^ヲ、

是^レ周^ノ公^ノ教^{ムル}王^{ヲシテ}遂^ゲ過^{チテ}也。

(注) 1 之主——その国の王。

2 苟——いいかげんにする。

3 婦寺——宮女(侍女)や宦官(後宮に仕えた去勢された男子)。

4 当——適當。道理に照らして当たっている。

5 病——欠点。害。

問 1

二重傍線部①「称」・②「中」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

28

29

①

28 「称」

- ⑤ 挙用 ④ 推測 ③ 納得 ② 発言 ① 賛美

②

29 「中」

- ⑤ 妥当 ④ 内省 ③ 命中 ② 慎重 ① 不正

問2 傍線部A「於是遂封唐叔虞於晋」とあるが、周公がそのようにしたのはなぜか。その説明として最も適当なもの

のを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

30。

- ① 天子の言葉は重いものであり、一度発せられたことは必ず実行されなければならないことを教えるため。
- ② たとえ幼い兄弟の間の遊びの場でも、天子は決して冗談を言ってはならないことを強く自覚させるため。
- ③ 諸侯に封じてもらって喜んでいる唐叔虞の気持ちを考えると、今更冗談だったとは言えないと思ったから。
- ④ 天子というものは己れの持っている権力を、後先あとでを考えず乱用してはならないことを強く諫めるいさめため。
- ⑤ 冗談から起こったことではあるが、弟はいずれ諸侯に封ずべきであり、丁度よい機会だと考えたから。

問3

傍線部B「設有不幸王以桐葉戲婦寺、亦將拳而從之乎」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

① 設有_二不幸王_一以_二桐葉_一戲_二婦寺_一、亦將_二拳而從_レ之乎

設し不幸有りて王桐の葉を以て婦寺に戯るれば、亦將に_{またまさ}挙げて之に_{これ}從ふべきか

② 設有_二不幸王_一以_二桐葉_一戲_二婦寺_一、亦將_二拳而從_レ之乎

設し不幸有りて王桐の葉を以て婦寺に戯るれば、亦將も_{しやう}挙げて之に從はんか

③ 設有_下不幸王_一以_二桐葉_一戲_中婦寺_上、亦將_二拳而從_レ之乎

設し不幸にして王桐の葉を以て婦寺に戯ること有らば、亦將に挙げて之に從はんとするか

④ 設有_二不幸王_一以_二桐葉_一戲_二婦寺_一、亦將_二拳而從_レ之乎

設し不幸にして王の桐の葉を以てする有りて婦寺に戯るれば、亦將も挙げて之に從はんや

⑤ 設有_二不幸王_一以_二桐葉_一戲_二婦寺_一、亦將_二拳而從_レ之乎

設し不幸なる王有りて桐の葉を以て婦寺に戯るれば、亦將に挙げて之に從はんとするか

問4 傍線部C「而況以其戯乎」とあるが、どのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 弟の唐叔虞はまだ幼くて実際に諸侯として一国を治める力はなく、まして遊びの上でのことなのだから、諸侯に封ずべきではないということ。
- ② 天子とはいえ成王はまだ幼く、遊びの場での冗談だったのであり、まして輔佐役ほさの立場であればなおさら真まに受けてはならないということ。
- ③ 天子の言は必ず実行しなければならないのだから、たとえ宮女や宦官に対して発した冗談でもそのまま実行しなければならないということ。
- ④ 天子の言とはいえ、道理にかなっていないことは正さなければならないのであり、まして冗談であればなおさら正さなければならぬということ。
- ⑤ 明らかに冗談とわかっていることを無理やり実行させるということは、天子に間違ったことを実行することを強いることになるということ。

問5 次に掲げるのは、授業の中で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】について話し合った生徒の会話である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

生徒A 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】では、周公に対する評価が違っているよね。

生徒B 【文章Ⅰ】では、文末で言っているように、周公は、幼い成王に対して【X】という評価になっている。

生徒C でも、【文章Ⅱ】で柳宗元は【Y】と言ってるんだよね。

生徒A それは、『説苑』の評価に対する批判であって、周公そのものに対するものではないんじゃないかな。

生徒B 【文章Ⅱ】で柳宗元は、周公に対して【Z】と言いたいんだと思うんだよね。

生徒C なるほど。それはたしかにそうだね。まして、成王はまだ幼いわけだし。

(i) 【X】に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は【33】。

- ① 天子は弟に対しても冗談を言ってはならないと諫めた
- ② 冗談から始まった国家の混乱の収束をはかった
- ③ 天子の言の重さを教え、国の威信を示し、よく諫言かんげんした
- ④ 叔父としてよく王を輔佐し、草創期の周王室を支えた

(ii)

Y

に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

34

- ①『説苑』の逸話が本当に聖人周公のことなのかどうか疑わしい
- ②成王の冗談を実行させた周公を聖人と言ってよいだろうか
- ③周公は王の言葉は必ず実行すべきであることを教えるべきであった
- ④周公は輔佐役でありながら王に過ちを実行させた悪人である

(iii)

Z

に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

35

- ①「天子に戯言無し」という理屈だけを強行させていては、成王の行跡に傷をつけ、歴史に汚点を残すことになるから、冗談のままで済ますべきであった
- ②「天子に戯言無し」とはいえ、その「戯言」が正しいかどうか大切であり、その判断が曖昧であったことが、聖人周公としてはやや遺憾であった
- ③「天子に戯言無し」はそのとおりであり、過ちを実行させることにはなったが、重い教訓を成王に自覚させた点で、周公は立派だったと言うべきである
- ④「天子に戯言無し」はわかるが、明らかに冗談であって適切でない言に対しては、頑^{かた}なに実行させず、正してやることのほうが大切だったのではないか

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

◆解答解説は試験終了後、下記に掲載します。すぐに復習しよう！

東進生：学力 POS「教材ダウンロード」

一般生：東進ドットコム「復習ツール」

<https://www.toshin.com/exams/kyotsu/>



閲覧パスワード：2091